

第2回 東邦大学看護研究会盛会裏に終わる

メイン・テーマ『看護実践能力の育成 一実践知を求めて一』

東邦大学佐倉看護専門学校 副校長 山崎 美代子

去る平成14年12月21日(土)に、283名の参加者を得て特別講演、シンポジウム、一般演題40題(口演32題・示説8題)と充実した研究会となった。発表会場を4ヶ所に分け、興味や関心のあるテーマを選んで参加でき、発表内容も日々の臨床や教育活動からの課題が多いため、活発な意見交換がなされた。

特別講演は井部俊子先生(聖路加国際病院看護部長)に、「臨床ナースと看護研究」というテーマでお話を頂いた。またシンポジウムは「看護実践能力の向上をめざして」をテーマに元患者の木内博文氏から「こんな看護師に会いたい」、三砂ちづる氏から「看護のヒューマニゼーション」、長谷川美津子氏から「科学的な看護実践」、佐藤紀子氏から「臨床能力を育てる教育」と題して講演を頂いた。

昨年を100名も上回る参加者が「より良い看護実践能力の向上」を目指して集い、語り合い、問題を考えた一日であった。

研究会終了後、高齢者看護学教授の藤田啓子先生から「井部俊子先生の講演は“研究研究という前に、その素地をいかに作るか、それが出来れば研究は自ずとできる”その研究の素地作りの大切さを言われていたように思う。」というメールをいただいた。

その言葉は私の胸にズシーンと響き、同時にシモーヌ・ヴェイユ著『神を待ちのぞむ』の中の「学業に励むこと」の一説を思い起こさせてくれた。

～知性は、ただ欲望にだけ導かれて動く。欲望が出てくるためには、楽しさと喜びがなければならない。知性は、ただ喜びの中でだけ大きく育ち、実を結ぶ。「学ぶ」という喜びが学習にとって、なくてはならないものである。喜



総会での活動報告

びが欠けているところに学ぶ人は存在せず、ただ哀れな見習い工まがいの者が居るだけで、見習い期間が終わっても、なんら手に仕事が付いていないという有様になるであろう～ という箇所を。

看護も、研究も同じことが言えよう。

看護を追求したいという喜びや楽しさが、より深く広く学びたいという欲求につながり、物事を実践していく知性へと、つまりメインテーマであった実践知へと導かれていく。

今日一日元気でも、明日は看護を受けるかもしれないという、危うい生命の持ち主である私たち。専門職として満足のいく看護を提供し、そしてまた受けたいものである。

共に東邦という傘の中で、切磋琢磨できる仲間と、場を持っていることはとても幸せなことである。共に手を携えて、「より良い看護実践」のために臨床も教育も研究も前へと押し進めていきたいものである。

第2回東邦大学看護研究会

メインテーマ:

「看護実践能力の育成」 ～実践値を求めて～

日 時 平成14年12月21日(土)9:50～17:00
会 場 東邦大学医学部看護学科 総合司会／斎藤 益子
●会長挨拶 梶山祥子(東邦大学医学部看護学科)

■一般演題〔口演〕16題

■特別講演

「臨床ナースと看護研究」

講師 井部 俊子(聖路加国際病院)
座長 山崎美代子(東邦大学佐倉看護専門学校)

(抄録)

臨床ナースと看護研究との関係はさまざまである。研究によってもたらされた発見に興奮することもあれば、チームワークのよさに感激することもある。一方で、定期的にまわってくる「研究係」とやらが重圧となり、そのために職を辞する人もあると聞いている。

そもそも臨床ナースは、看護ケアを実践することが第一義的な役割であり、研究を行うためのトレーニングや資金、環境(文献を調べたり、指導をうけたり、討論する仲間)が保証されているわけではない。

しかしながら、臨床ナースは直接的、間接的に研究にかかわることができる。臨床で認識される疑

問や問題を研究者にもち込んだり、先行研究を吟味して臨床実践にとり入れることができる。研究者が行うアンケートやインタビューに協力することも研究への参加となる。

聖路加国際病院では、臨床実践を高めるためのいくつかのしかけがある。それらは、「リソースナースたちの活用」であったり、「手あげによる検討会への参加」であったり、「キャリア開発ラダー」であったり、「プリセプターのためのワークショップ」であったり、「インターンシップサマープログラム」であったり、「スキルアップクラス」などである。

「看護部業績発表会」もそうしたしかけのひとつである。他の多くの病院が使っている「看護研究発表会」とは異なった名称をつけた理由は、ステレオタイプな研究発表会を超えた、皆が自発的に参加し、同僚たちの業績を讃え、感動する場としたからである。この業績発表会の入賞演題には表彰状と賞金がついている。第3位、第2位、第1位と発表されるに伴い、会場の雰囲気は高まり、借しめない拍手がおこり人々の表情が輝く。今年もその季節がやってくる。

■総会

■一般演題〔示説〕8題

■一般演題〔口演〕32題

■シンポジウム

「看護実践能力の向上をめざして」

「こんな看護師に会いたい」
木内 博文(元患者の立場から)

「看護のヒューマニゼーション」

三砂ちづる(国立保健医療科学院疫学部)

「科学的な看護実践」

長谷川美津子(東邦大学医学部看護学科)

「臨床能力を育てる教育」

佐藤 紀子(東京女子医科大学看護学部)

座長 森田 啓子(東邦大学医学部附属大橋病院)
斎藤 益子(東邦大学医学部看護学科)

第2回「東邦大学看護研究会」に参加して

東邦大学医学部附属大橋病院 4階西病棟 主任 小林 敏子

2回目を迎えた今年の看護研究会は、多くの演題・講演・シンポジウムが企画され、とても興味深かった。

一般演題では、職場で問題となっている様々な視点から研究されていた。また、教育の現場の課題など、改めて看護の実践の奥深さを知る機会となった。中でも、シンポジウムの「臨床判断を育てる教育」について講演された佐藤紀子先生は、実践的に基づいた講演であった。その為自分が後輩指導を実践していく中で、悩んでいる事も、思

わず納得し、行ってきた事が、間違いないのだと、自信を持たせてくれるような話であった。特に印象的な言葉は「人は一人では成長できない。同僚と語り、討議すること、看護師同士支えあうことが必要である。成長するには痛みを伴う。」と話されていた事が、心の中に印象づいている。

今後もそんな佐藤先生の力強い言葉をかみ締めながら、看護実践能力の向上に努めて行きたいと思う。

東邦大学医学部附属佐倉病院 5階病棟 主任 松田 敦子

看護の実践・教育・研究の向上と発展を目指して、東邦大学看護研究会が平成13年度より開催されていることを聞き、今回、自分たちの研究成果の発表と発表される演題が各施設内に留まらない様々な研究内容であることを知り、日々の看護実践に生かせる知識を得るチャンスと思い、この研究会への参加を決めました。

実際の一般演題では、看護業務に関すること、事故防止に関すること、また症例研究などの研究が報告され、それぞれ大変興味深いものでした。その中でも特に印象的であったのは、井部先生の特別講演でした。

看護研究に対する私の今までの考え方は、必ずしもポジティブなものではなく、研究を遂行していく上で必要な資金・環境・時間などが十分に与えられているわけでもなく、時には、定期的に回ってくる

憂鬱な仕事のひとつ…などと考えることもあったかもしれません。患者様によりよい看護を提供できた実感や喜びも研究を通して得られるものですが、忙しい業務の中で、看護研究をすることの意味にある限界を感じていたのかもしれません。しかし、井部先生の講演を聴き、臨床ナースの役割・立場を考えた時に「看護ケアを実践すること」「研究を吟味して臨床実践に取り入れること」が研究の第一義目的であるという簡単なことに改めて気づかされました。

病棟のスタッフ・学生を指導していく立場上、研究方法・進め方についても看護師としての経験や感に頼るものではなく、科学的根拠の基づいたものとなるよう努力し、また、看護研究にも継続して取り組んでいきたいと思えます。

共同研究について

東邦大学医学部附属大森病院 外来・在宅療養相談室 主任 杉宮 伸子

現在、看護学科の美ノ谷・福嶋両先生と大森病院在宅療養相談室の看護師2名で研究を行っています。テーマは「在宅療養支援システムの構築」です。これは、自作のアセスメントシートを用い、患者様と看護師が共に退院後の生活をイメージし、患者様が自らの意思で、在宅介護支援センターに必要な支援を求めるといったものです。看護研究といえば、病院内での研究しか経験が無かった私なので、美ノ谷先生からお誘いを受けた時には、果たして自分にできるのだろうか…と不安を感じていました。しかし、研究内容は私にとって非常に興味深く、今後この研究で考えているようなシステムが実現すれば、入院患者様・病院と地域がより近い存在となり、看護師も患者様も安心した状態で退院を迎える事ができます。そのシステムを作る第一歩を踏み出すメンバーになる事ができるならと考え、参加させていただきました。

実際に研究を始めてみると、ミーティングのための日程調整はもちろん、アセスメントシートに使う言葉1つにも、4人それぞれの考え方があり、研究の方向性を統一する事の難しさを実感しました。しかし、

看護師と先生の視点や考え方の違いがあるからこそ、それぞれが意見を出し合い、検討する事で、研究内容がより深いものになっていると感じます。また現在、プレテストを行っており、病棟に協力を得てアセスメントシートを使用してもらっています。しかし、対象者などの問題もあり、なかなか事例が出ない事から、あせり、不安な時期を過ごしていました。他のメンバーも同じ気持ちでいたと思います。そして、先日初めての事例が出ました。実際に記入されたアセスメントシートを手にし、電話で先生の嬉しそうな声を聞いた時、自分自身の喜びも、より大きくなったと感じました。辛い事も多いですが、苦しさや喜びなど、同じ気持ちを共有できるメンバーがいるからこそ、乗り越えて行けるのだと実感しています。

今後は本実施となります。先は長く、どのような結果になるか考えれば不安な事ばかりです。しかし、東邦看護研究会で皆様に私共の研究を聞いていただける日を目指し、4人力を合わせて頑張りたいと思っています。

東邦大学看護研究会誌への投稿のご案内について

厳寒の季節ですが、梅の花が一足早い春を告げています。

会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお察しいたします。

さて、当研究会では、研究会誌第1号を発行することになり、現在第1・2回の研究会でご発表された方々より投稿原稿を募集中です。他の研究会誌、学会誌等に掲載されていないものに限りますが、ふるってご投稿下さいますようお願い申し上げます。

研究会誌ができることで、研究発表の内容がその場限りのものでなく、次の研究のヒントになり、後に様々な知見の集積となって会員の皆様の共有財産となることを願っております。

編集委員会では、皆様のお役に立てられるような会誌の発行に向けて努力していきたく思いますので多数のご応募を期待しております。

編集委員会メンバー 委員長 斎藤 益子

高橋 正子 大木 伸子 村岡 宏子

都橋 薫 加島 千種 浅野 祐子

お知らせ

第3回東邦大学看護研究会は、2003年12月20日（土）の予定です。

次回のニュースレターなどで、演題募集の詳細について掲載しますので、現在研究を進めている皆さん、あるいは各施設で発表された皆さん、是非ご応募ください。



東邦大学看護研究会に入会しませんか？

年会費：2,000円

年1回の総会及び研究会と年2回のニュースレターを発行します。

東邦大学内の看護実践及び研究の現状を知り、親睦を深めることができます。

編集後記

大変遅くなりましたが、ニュースレター第2号を発行することが出来ました。これからは、各施設の研究への取り組みについても、随時紹介していきたいと思っております。ご意見、ご感想、研究に関する記事等をお寄せください。お待ちしております。

担当者

ニュースレター事務局

東邦大学佐倉看護専門学校 伊藤茂理
〒285-0841 千葉県佐倉市下志津292-13

TEL 043-462-8811

FAX 043-462-8810

e-mail: shigeri@med.toho-u.ac.jp